

# 1 小柳班

## 日本人の胃癌の発生におけるヘリコバクターピロリ感染とHLA拘束性に関する研究

**【研究代表者】**

小柳 泰久 東京医科大学第3外科

**【研究課題】**

日本人の胃癌の発生におけるヘリコバクターピロリ感染とHLA拘束性に関する研究

**【研究目的】**

本研究の目的は、胃痛患者の消化性潰瘍既往歴の解析より仮定されたHLA抗原の意義の解明などの解析を通じて、その遺伝子の特性、機能及び機序を明らかにすることにある。

**【研究成果】**

消化性潰瘍既往歴は、内服治療歴があることとした。対象症例は胃切除術を施行された2161例で、十二指腸潰瘍（胃十二指腸並存潰瘍を含む）既往を持つ患者は54例（2.5%）、胃潰瘍の既往

を持つ患者は223例（10.3%）であった（Table 1）。10年生存率は、既往歴なし、十二指腸潰瘍既往歴、胃潰瘍既往歴を持つ患者、それぞれ、51.9%、64.5%、70.1%であった。Stage別では、stage 3 Aのみで有意の差が認められた（Fig.2～7）。Overdominant selectionの観点からの検討では、Class 1 & Class 2 Homozygoteの患者では、胃潰瘍既往歴患者が有意に予後良好であった。Class 1 & Class 2 Heterozygoteの患者では十二指腸潰瘍既往歴患者が全員生存していたが、有意の差は認められなかった（Fig.8～11）。Helicobacter pylori抗体価毎の予後は、>800units/mlを示す症例が最も予後良好であった（Fig.12）。

**【考察】**

消化性潰瘍、胃癌の発生、病態にはともにHelicobacter pylori感染が関与していると考えら

Table 1 対象症例

既往歴		stage 1A	stage 1B	stage 2	stage 3A	stage 3B	stage 4	Total
なし	No.	744	245	199	167	73	456	1884
	%	82.4	83.3	89.2	93.3	96.1	93.8	87.2
UD (UD+UVD)	No.	32	10	3	3	0	6	54
	%	3.5	3.4	1.3	1.7	0	1.2	2.5
UV	No.	127	39	21	9	3	24	223
	%	14.1	13.3	9.4	5.0	3.9	4.9	10.3
Total	No.	903	294	223	179	76	486	2161
	%	41.8	13.6	10.3	8.3	3.5	22.5	100

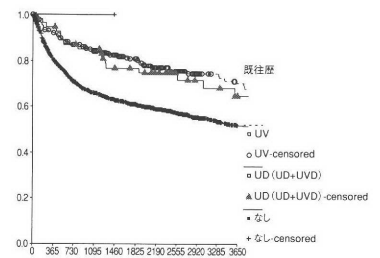


Fig.1 全症例

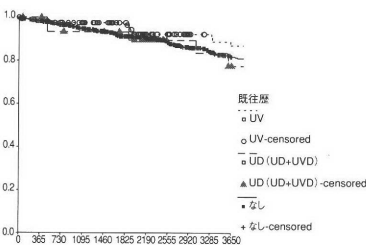


Fig. 2 stage 1A

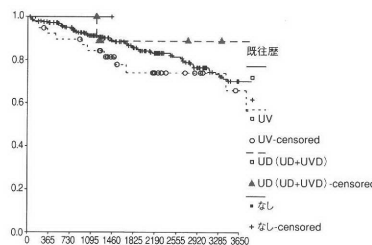


Fig. 3 stage 1B

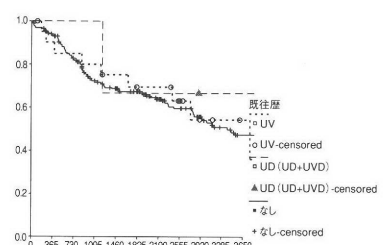


Fig. 4 stage 2

れている。しかし、今回検討したように、胃癌発生以前に潰瘍症を発症する患者は少ない。このdiscrepancyをどのように理解したらよいか、基礎的なデータは皆無である。あえて今回の結果からいうと、HP除菌は、胃癌の発生頻度の高い日本では、あまり推奨できないのではないかと考える。

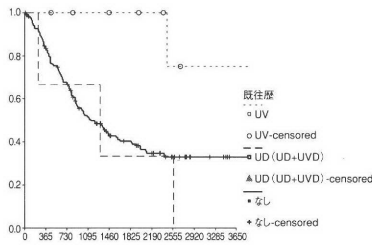


Fig. 5 stage 3A

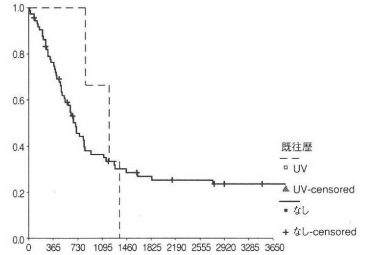


Fig. 6 stage 3B

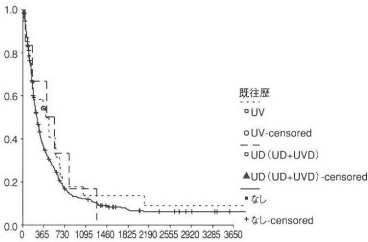


Fig. 7 stage 4

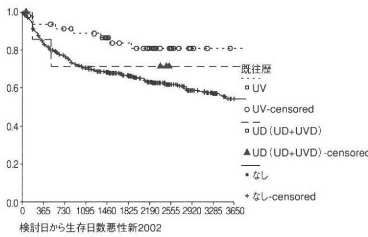


Fig. 8 Class 1 homozygote  
Class 2 homozygote

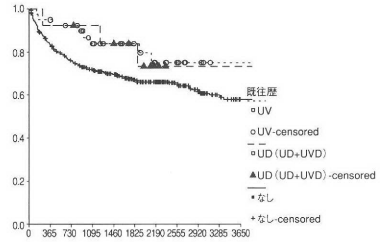


Fig. 9 Class 1 homozygote  
Class 2 heterozygote

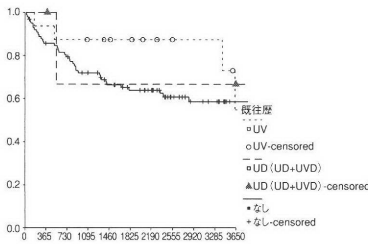


Fig. 10 Class 1 heterozygote  
Class 2 homozygote

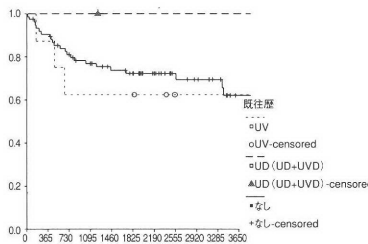


Fig. 11 Class 1 heterozygote  
Class 2 heterozygote

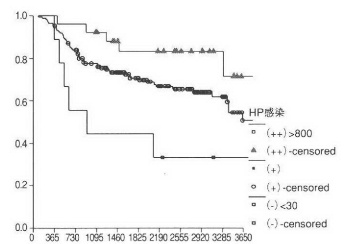


Fig. 12 Helicobacter pylori抗体価と  
予後

## 2 生越班

### 日本人の癌の発生、治療応答に関わる 遺伝学的要因に関する研究

[研究代表者]

生越 喬二 東海大学消化器外科

[研究課題]

日本人の癌の発生、治療応答に関わる遺伝学

的要因に関する研究

[研究目的]

癌の発生及び癌治療に対する応答は、遺伝学的素因及び後生的遺伝子変化(変異)によって